

プリンス・リージェントの功罪と キャロライン裁判の顛末（I）

西山 清

すでに前回までの論文で幾度か言及したことだが、George IV (George Augustus Frederick, 1762-1830) は Prince Regent 時代の 1818 年 7 月にフィレンツェで開催された造形芸術博覧会にエルギン・マーブルの複製を寄贈して、その返礼として Niobe 彫像の複製を贈られている。また、1823 年には国王として、マンチェスター市立美術館にエントランス・ホールを飾る壮大な大理石像群の複製を寄贈したりなどもしている。West の後を継いで RA 院長に就任した Sir Thomas Lawrence は 1820 年の例会における講演で、国王からアカデミーに寄贈された古代ギリシア彫刻群の複製を活用してこの国に芸術の大輪を花開かせようと聴衆に訴えていた。(GM Dec. 1820) さらに、当代ヨーロッパの彫刻界の巨匠 Canova がエルギン・マーブル鑑定のためにロンドンを訪れたおり、皇太子は雀躍するかのように彼の謁見の申し出を受け入れていた。

古代ギリシア、ローマの造形芸術に再評価の光が当てられた啓蒙時代の掉尾を飾るかのように、この皇太子の活動は、現代のイギリス社会まで継承されている古典の造形芸術や建築様式の流布に裨益するところ大であった。他方、皇太子の存在には、常に民衆から嘲笑交じりの非難を浴びせられるような言動が付随するという、大いなる負の側面があった。

15 歳のときに侍従から「この人はやがてヨーロッパ随一の洗練された紳士になるか、完成された悪党になるか、おそらくはその両方になるだろう」(Delderfield 117) と予言されていたのだが、たしかに皇太子時代のジョージは毀誉褒貶相半ばする人物であった。

国家財政の危機などどこ吹く風と豪華な Carlton House (Henry Holland 設計) で夜毎繰り広げられた饗宴、「贅」と「税」の限りを尽くしてブライトンに建設された珍妙な東洋趣味の Royal Pavilion (John Nash 設計)、あるいは Mary Robinson をはじめとして切れ目なく繰り返されていた年上の女性たちとの関係など、など、ジョージは庶民の憎悪と冷笑を掻き立てる格好の話題を提供し続けた。キーツの未完の諷刺詩 'The Jealousies' で妖精王国の "Emperor Elfinan" として描かれ、世に知らぬ者なしとされたその人である。

[Elfinan was] fame'd ev'rywhere

For love of mortal women, maidens fair,

Whose lips were solid, whose soft hands were made

Of a fit mould and beauty, ripe and rare,
 To pamper his slight wooing, warm yet staid:
 He lov'd girls smooth as shades, but hated a mere shade.

(4-9)

当時の英語でズボンのことを“inexpressibles”とも言ったが、これはジョージに関してはまさに言えて妙なことばであった。齢五十にして立派な痛風もち、大酒と大食で培った250ポンドの巨漢の顔は上半身もろとも見事に膨れ上がり、その巨軀を支えるパンパンに張った真っ白なズボンの後ろ姿はたしかに「曰く言い難い」ものであり、まさに放蕩生活の賜物として社交界では格好の見もののひとつに数えられていた。（図1）Sir Thomas Lawrenceの筆になるおなじみの立像などは、あまりにも控え目というか、おもね過ぎであろう。おもね過ぎといえば、1812年3月19日の右翼紙*Morning Post*ではジョージは「民衆の栄光、現代のマエケナス、雄弁家、美しきアドニス」と齒の浮くような賛辞で飾り立てられたのだが、Leigh Huntはこれに噛みついた。



図1 <A View of the R-G-T's Bomb> Charles Williams, August 1816

What person, unacquainted with the true state of the case, would imagine, in reading these astounding eulogies, that this *Glory of the People* was the subject of millions of shrugs and reproaches!...That this *Mecenas of the Age* patronized not a single deserving writer! That this *Breather of Eloquence* could not say a few decent, extempore words...That this *Conqueror of Hearts* was the disappointer of hopes! That this *Exciter of Desire* (bravo, Messieurs of the *Post*!) this *Adonis in Loveliness*, was a corpulent gentleman of fifty!

(*Examiner*, 22 Mar. 1812)

少し筆が滑りすぎたようで、ハントと弟の John はそれぞれ罰金 500 ポンドと 2 年間の禁固刑に処せられた。いっぽう、Shelley はこの巨軀と驕慢を揶揄して *Swellfoot, the Tyrant* なる諷刺詩を物している。*Animal Farm* の Napoleon よろしく、豚の王国 Thebes を支配する「膨れ脚の君」が「空腹」(Famine) の祭壇に奉ずる祈願は次のように始まる。

THOU supreme Goddess! By whose power divine

These graceful limbs are clothed in proud array

(*He contemplates himself with satisfaction.*)

Of gold and purple, and this kingly paunch

Swells like a sail before a favouring breeze,

And these most sacred nether promontories

Lie satisfied with layers of fat.

(I, 1-6)

「膨れ脚の君」の悪行の数々は後段で検証するとして、Lamb の諷刺もまたキツイ。*Examiner* 紙上 (15 Mar. 1812) で海の怪物にたとえられた皇太子と、彼を “Prinnie” などと呼ぶ「取り巻きども」(“toadies”, Bury I 209) には、皇太子ともども最初から最後まで強烈なパンチが浴びせられる。

Not a mightier whale than this

In the vast Atlantic is;

Not a fatter fish than he

Flounders round the polar sea.

.....

Every fish of generous kind

Scuds aside, or slinks behind;

But about his presence keep

All the Monsters of the Deep;
Mermaids, with their tails and singing
His delighted fancy stinging.

とどめは、次の一撃。

By his bulk and by his size,
By his oily qualities,
This (or else my eyesight fails)
This should be the PRINCE OF WHALES.

(‘The Triumph of the Whale’ 3-6, 13-18, 49-52)

お見事！あの Monk Lewis も、友人の女官に宛てた手紙でこの詩には大喝采を送っていた。(Bury I 75) 実際には庶民の目を避けるように彼の生活の場はほぼカールトン・ハウスとパビリオンに限られていたため、一般庶民が直接その姿を目にすることはそれほど頻繁にはなかったと思われる。それでも、彼に対する庶民の嘲笑と羨望の入り混じった感情は、Gillray や Cruikshank の政治漫画や諷刺画などにより余すところなく伝えられていたので、庶民はそれを見ては溜飲を下げていたというところだろう。(図 2)



図 2 <A New way of mounting your horse in spite of the GOUT!!> Anonymous, c. 1816

その一方で、ジョージは文学や造形芸術、建築、はては服飾デザイン（とりわけ軍服）などに対してはたしかに独特の鑑識眼を有しており、芸術家や建築家の精力的なパトロンとなっていた。諷刺画ではしばしば道化師帽（fool's cap）を被せられてはいるものの（図3）、ジョージは世に言う単なる“foppish idol”だけにとどまる男ではなかった。Scott や Jane Austen の熱烈な愛読者でもあったように（スコットは国王が1822年にスコットランドを訪れたおりには盛大な歓迎の宴を張った）、文学を愛し、父親が残した蔵書をもとに British Library の基礎となる King's Library を開設した。また、みずからは Reynolds や Gainsborough のパトロンでもあったのだが、これまた同時代に美術界のパトロンとして際立っていた Angerstein の死後には、Rubens, Rembrandt, Titian, Hogarth, Turner などを含む40点ほどの絵画コレクションを57,000ポンドで政府に買わせ、1824年に開館する National Gallery の基礎を築いている。

さらに、摂政皇太子時代の1811年には John Nash（1752-1835）を中心とする建築家らに命じて、West End の北に広がる Marylebone Fields と呼ばれる一帯の開拓に乗り出した。当時はここは畑や森が広がり、ロンドン中心部から適当な距離があることも幸いしてか、しばしば決闘の場として好まれていたが、その昔には名うての追剥 Dick Turpin（1706-39）も徘徊していた。久しく地主らに農地として貸し出されていたのだが、このたび19世紀という改革、変貌の時代にふさわしく開発の鉞が入れられることになったわけである。

古くは Christopher Wren（1632-1723）、James Gibbs（1682-1754）、Robert（1728-92）と James



図3 <Non Commission Officers Embarking for Botany Bay> John Boyne, November 1786

(1730-94) の Adam 兄弟、その後は Sir John Soane (1753-1837) や William Wilkins (1778-1839) など、個々の優れた建築家を輩出したとはいえ、ロンドンがパリやローマ、ペテルスブルグなどの大都市とは異なり、為政者や建築家により優れて統率のとれた都市計画が提案されたことはなかった。(Whitfield 115) ほとんど唯一といえる壮大な構想が、ナッシュとジョージのコンビによって 19 世紀初頭に具現化されたのである。ジョージが摂政皇太子として国家の指揮をとり始めたころ、齢五十に達しようかというナッシュが皇太子のかつての愛人のひとりと結婚するという偶然で、ナッシュはジョージという大盤振る舞いのパトロンを得たのだった。

ナッシュは Capability Brown (1715-83) 亡きあとに風景庭園の様式を築いた Humphry Repton (1752-1818) と協同して、Regent's Park の造成を計画した。すなわち、この広大な土地に五十もの邸宅を十分な距離を保って配し、そのうちの一面を皇太子の遊興のための亭に充てる予定であった。しかし、この案は Crown Commissioners に拒否されて中止と相成ったため、それならばと、ナッシュは自身の才能を公園の周囲に向け、そこに古典様式の柱廊を備えたテラスハウス群を造成した。(Weinreb 644-45) 現在もなお壮麗なたたずまいを見せる東側道路沿いの stucco 仕上げの Cumberland Terrace や南側の Park Crescent などは、その典型的な例である。リージェンツ・パークを出て Park Square を抜け Park Crescent を経て、Portland Place から Langham Place を経て Oxford Circus 抜けると、その先の Regent Street は西側に Quadrant と呼ばれる優雅な曲線を描いて Piccadilly Circus へとつながり、Lower Regent Street を通り Pall Mall のカールトン・ハウスにいたる、この 1 マイル半ほどの直線と曲線を巧みに組み合わせたものが ceremonial route と呼ばれる新道であった。(図 4) これにより、マリルボン地区とウェストミンスターが一本の道路で結ばれ、交通混雑の緩和と経済活動の活性化がはかれることになった。通り沿いの建物も含めて一連の造営事業は、おおむね 1817 年から 23 年のあいだにすべて完成され、いわゆる *rus in urbe* を理想とする都市計画の具現化となった。

ところが、1820 年代の後半にジョージがカールトン・ハウスを取り壊して Buckingham Palace に引越す決心をしたことで、この新しい通りの終点は王宮ではなく St James's Park へ下りる階段だけになるという、なんともおさまりの悪い尻切れトンボになってしまう。1835 年にヨーク公の記念柱が建立されたのはこの空白域を埋るためだった、と言ってしまえば身も蓋もないか。取り壊されたカールトン・ハウスの暖炉や扉はバッキンガム宮殿と Windsor Castle に移設され、温室 (conservatory) の紋章入りステンドグラスもウィンザー城の窓を飾ることになった。また、コリント風の柱廊玄関はナショナル・ギャラリーの正面玄関に寄贈されたが、このギャラリーはもともとエルギン・マーブルの購入騒動において購入反対の立場をとっていた建築家 William Wilkins が設計したものであったため、玄関とキューポラを戴く建物本体の様式とは今日見ても微妙なズレがある。ナッシュはジョージの命を受けてバッキンガム宮殿の改修に取り掛かったのだが、この事業も 1830 年にジョージが亡くなったために頓挫してしまい、それまでジョージを盾として膨大な建設費を湯水のように使い続けていたナッシュもお払い箱となってしまった。しかしながら、ゴシック建築と覇を競うようにナッシュとジョージのコンビが生み出したネオ・クラシカルな街路や化粧漆喰の建造物が、今もロン

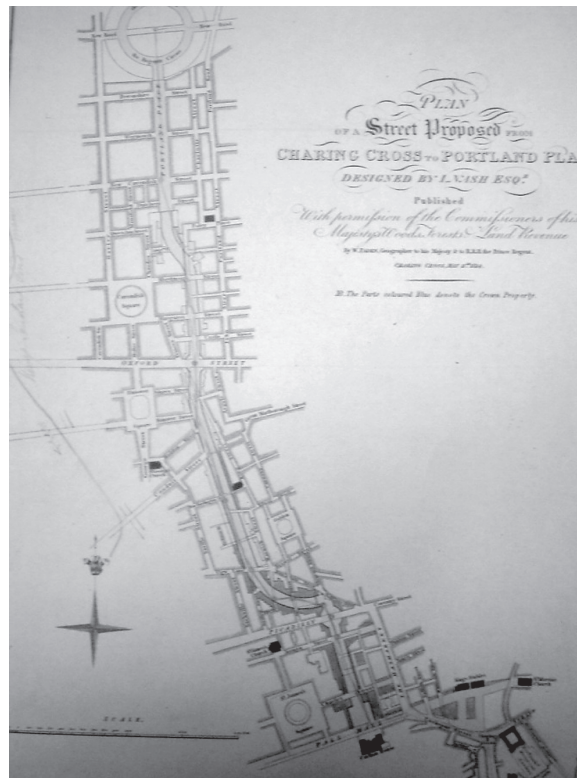


図 4

ドンのウェストエンドに特有の街並みを残すことになったのは、僥倖であったといえようか。

さて、手許に Lady Charlotte Bury という女性の日記がある。母親譲りの美貌で知られたこの女性は第五代 Argyll 公 John の娘で、ジョージの妃 Princess Caroline の女官を二十年近く務めていた。彼女は女官としての一流の教養を身につけており、Monk Lewis や考古学者で旅行家の William Gell,あるいは後にキャロライン裁判で司法長官（Attorney General）も務める弁護士 Henry Brougham などとも交流があった。この日記は 1838 年に出版されたものであるが、王室スキャンダルに連なる数多の挿話が克明に記されていたために、出版当初から毀誉褒貶相半ばする本であった。Hood などは発売後ほどなくしてこの本を読んで、死んだあとから私生活を暴かれるなんぞは真っ平御免と、例のごとく軽妙な洒落で皮肉っている。

When I resign this world so briary,
To have across the Styx my ferrying,
O, may I die without a DIARY
And be interr'd without a BURY-ing.

The poor dear dead have been laid out in vain,
 Turn'd into cash, they are laid out again!
 ('The Last Wish')

彼女の母親は、ジョージ三世の妃となる Queen Charlotte がドイツから嫁いでくるおりに介添役を務めた女性であり、その縁あって彼女の名前は王妃から与えられたものであった。母親譲りの美貌でその名を知られていたが、1861年に亡くなるまでこの日記のほかにも *Self Indulgence* (1812) や *Conduct is Fate* (1822) など10篇以上の sentimental novels や詩を書き、どの小説も200ポンドほどの印税を彼女にもたらしたとされる人気作家であった。(Bury, Introduction) 当代の著名人が多数登場するビューリーの日記の内容を定期刊行物や新聞等の記事に組み入れてみると、王妃キャロラインとジョージの離婚にまつわる騒動と人間関係の実態が奥行きをもって見えてくる。この騒動は、ジョージ四世が当代きっての洒落者、道楽者としての名をほしいままにした Prince of Wales 時代から、Prince Regent を経て国王となった翌年の1821年まで続いた。ジョージ三世と四世の治世はロマン派の活動期に重なる政治諷刺の黄金時代であったが、フランス革命を挟んだこの激動の時代に庶民の怒りを買い、またさんざん嘲笑を浴びせられた挙げ句、なんとも締まらない結末を迎える離婚騒動の顛末をここに探る。

そもそも、皇太子ジョージと王妃キャロラインとの離婚騒動が巷間広く知られるようになったのは、1806年7月14日付で *The Report* と呼ばれる報告書が国王に提出されたことによる。この報告書の出所となったのは、当時すでにジョージと別居していたキャロラインの不品行と、その結果として生まれたとされる私生児の問題を検証した、いわゆる <Delicate Investigation> であった。この調査により、噂の虚実がさまざまな証言や書簡を通して精査され、報告書にまとめあげられたわけだが、そもそもこのような調査がおこなわれることになったのは、Prince of Wales 時代の皇太子自身の不品行に起因するところが大きい。この報告書は、その後の覚書や書簡などキャロラインに有利な資料や証言も収録した *The Book* として、1813年にトーリーの首相 Spencer Perceval 名で出版された。ただし、パーシバルは前年の5月11日に狂人の手にかかり庶民院議場入口で殺害されたため、これは死後出版となった。

皇太子ジョージは Prince of Wales 時代の1784年の初夏のころ、劇場で出会った豊満な肉体と美貌を誇る魅惑的な未亡人 Maria Fitzherbert に一目ぼれし、猛烈な求愛行為を繰り返した末に、翌年、めでたく結婚した。彼女はジョージより六歳年上で、二度の結婚生活において二度とも夫に先立たれたカトリック教徒であった。たしかに魅力的な女性であったようで、のちにジョージの正妻になったキャロラインですら、「本当に素晴らしい人、縁が切れたのは皇太子にとってお気の毒」と言っていた。(Bury I 17) ジョージが死の床で最後まで離さなかったのは、彼女のミニチュア（肖像画）を入れた locket であったという。(Wright 96)

しかしながら、1772年にジョージ三世が導入した王室婚姻法（Royal Marriage Act）の定めるところによれば、25歳未満の王族の結婚は国王の同意がなければ無効とされ、また1701年の王位継承法（Act of Settlement）により、王位の法定推定相続人がローマ・カトリック教徒と結婚した場合には王位継承権を失うものとされていた。そのため、1785年12月にMayfairの彼女の家で秘密裏におこなわれた結婚は、ローマ教皇こそ正当な結婚と認めたものの、王室はじめ、国教会からも議会からも公認されたものではなかった。

結婚生活は当座は幸せなものであったが、ジョージは生来の浪費癖や女性関係の縮りの無さから王室費の枠を超えて個人的な借財を重ねていたため、やがてどうにも立ち行かなくなった。その金額は1786年当時で27万ポンドであり、翌87年にジョージは議会に借金の肩代わりを持ちかけた。昵懇の間柄であったWhigの領袖James Foxは庶民院で皇太子の結婚の事実を公式に否定したのだが、それでも議会は肩代わりを拒んだ。借財は1792年には40万ポンドにまで膨れ上がり、そのほとんどが皇太子の居所であるCarlton Houseの改装や調度品の買い入れと、ブライトンのパビリオン建設費用に、さらにはPall Mall街のフィッツハーバートの住居改装とブライトンでの新居建設などに充当されていた。1815年から22年にかけてナッシュが改築を手掛けることになるパビリオンには、インド、イスラム、中国などから調達した家具調度品が次々と運び込まれ、その額たるやわずか三年間で16万ポンドに及んだという。（Bryant 111）同じころすったもんだの大騒動の末、ようやく購入が認められたあのエルギン・マーブルでさえ3万5千ポンドでしかなかったことを考えれば、皇太子の浪費癖は庶民の反感を買って充分おつりがきたはずだった。

保守派で統制癖（control freak）のあるジョージ三世は、議会やトーリーの内閣に対してもアメリカ植民地に対しても統制力を発揮しようとしたが、そのどれにも影響力が及ばず、みじめな結果を招いた。家族に対しても統制権を振るおうと願ひ、六人の娘には自由な結婚を認めずバッキンガム・ハウスとウィンザーの居所に両親と同居することを迫ったが、彼女らはそこを「尼僧院」と呼び、父親の干渉を恨んだ。（Baker 102）八人の息子も父親の強権的な管理を嫌い、それぞれが自分の望む生活に流れていった。要するに、ハノーバー家に特有の懷疑、怨恨、嫉妬が家内に満ちていたのである。国王はとりわけ長男のジョージには目をかけていたはずであったが、フォックスらホイッグ党員と交友関係を結んだり、ふしだらな女性関係を続けていたのを許すわけにいなかった。この放蕩息子の借金の支払いを拒否したのは、むしろ当然のことであった。

他方、皇太子ジョージの側に立ってみれば、借金の支払いを議会に肩代わりしてもらい、王位の法定推定相続人としての身分を確定するためには、王妃となるプロテスタントの女性を正式に迎えることが必須の要件となった。しかも、相続人としての地位が確定すれば、現在、年間6万ポンドである王室費としての彼の取り分は10万ポンドに跳ね上がるはずだった。フィッツハーバートとの秘密結婚いらいすでに9年の月日が流れていた女好きのジョージにとっては、新しい愛人との生活のための資金源が求められるという利点もあった。ただし、後述するように、実はフィッツハーバートの側でもジョージとの間にすでに秋風が吹き始めたのを感じ取っていた。

ここで皇太子の相手として、王室と同族の Brunswick 公の娘 Caroline に白羽の矢が立ったわけだが、二人は面識すらない間柄だった。それでもこの選択はフランス共和国軍の侵攻を抑えるためにプロシアとの絆を強くするという国策に適うものであったため、父親ジョージの歓迎するところとなった。何にもまして、キャロラインの母親 Augusta がジョージ三世の姉であったこと、すなわち、皇太子がキャロラインの従兄にあたるという事実が国王を喜ばせ、結婚した後もキャロラインは事あるごとに義父の庇護を頼みとすることになる。もっとも、キャロラインという選択肢は、1793 年くらいジョージの愛人となっていた九歳年上の Lady Jersey が、愛人としての立場を確保するために、性格、容姿とも魅力的とはいえない女性をわざわざジョージに娶らせた、という説もある。(Baker 45) これとても確証はないのだが、結婚後のキャロラインとフィッツハーバート二人に対するジョージの非情な仕打ちを考えれば、ジャージー夫人の目論見はいちおう成功したといえよう。

ナポレオン率いるフランス軍の砲火が響くなか、大陸を縦断すべく 1794 年 12 月 29 日に故郷ドイツのブランズウィックをあとにしてキャロラインはイギリスに向かった。‘The Jealousies’ (以下、J.) では、故国で我の強いおてんば娘として鳴らしていたキャロラインの姿を彷彿させる筆致で、エルフィナンの許に嫁ぎゆく Bellanaine の旅路での様子が描かれている。

And so she journey'd, sleeping or awake,
Save when, for healthful exercise and air,
She chose to “promener à l'aile,” or take
A pigeon's somerset, for sport or change's sake.
(42-45)

ブランズウィックの彼女を迎えに国王から派遣された (“fluttering embassy”, J. 28) のは Malmesbury 男爵（のち伯爵）James Harris だったが、彼はかつて Frederick the Great of Prussia や Catherine the Great of Russia の宮廷に仕えた外交官であり、キャロラインの侍従役を務めることにもなった。(Robins 5) 悪天候や戦火のために旅程は大幅に遅れたのだが、ともかくも 1795 年 4 月 5 日にキャロラインの一行はテムズ川経由で Greenwich に上陸し、そこからジョージの待つ St James's Palace に向かった。三日後に執り行われた結婚式はむしろ「偽装」でしかなく、ジョージは宮殿に迎えたキャロラインにもおごなりの愛想を示しただけで背をむけてしまい、歓迎の夕食の席にはジャージー夫人が堂々と着席する始末。三日後の披露宴の晩には、これ見よがしの憂さ晴らしをするかのよう、大酒をあおり、花嫁に構わず炉格子の中でひとり眠り込んでしまった。

初婚のキャロラインにしてみれば、これは夢と希望に彩られた異国での新婚生活の始まりであり、彼女なりにジョージを愛そうという気持ちはあった。だが、ジョージからの非情な仕打ちと屈辱的な扱いは、彼女の気持ちを急速に冷えさせるに充分であった。いっぽう、マームズベリーからは礼儀作法を弁えること、口数は少なくすることと繰り返し聞かされていたものの、誰彼と見定めなく一方

的にしゃべり散らかし、慎み深さなど微塵もみせないキャロラインもまた、無節操、無分別で、浮薄な娘であることは、やがて彼女の身近にいる誰の目にも明らかになった。ビューリーは側近の中でもっとも長く女官を務めてキャロラインの行動をつぶさに観察していたのだが、彼女によれば、キャロラインは「女性に求められる特質は持ち合わせていないが、大胆で独立独行の性格という、偉大な女王となる必須の条件を備えている」（*Bury* I 20）女性だった。これはおそらくジョージの求める女性像とは程遠いものであっただろうし、洗練された立ち居振る舞いなどとはおよそ縁遠い彼女の資質に、ジョージの放縦で自堕落な性格が重なれば、この結婚の行きつく先はおおよそ見えていた。それでも、判官びいきと言おうか、叔父である国王ジョージはもちろんのこと、一般庶民にもキャロラインの欠点は純真さや開放的な性格の裏返しと映り、彼女は庶民の人気を博していた。

相手を敬い愛する気などさらさらないジョージは、結婚後もあいかわらずジャージーや別な愛人の方に心向け、キャロラインにはあからさまな嫌悪感を示すのみだった。キャロラインは、自分が強欲の神 *mammon* の借金の清算のための生贄であったことは知っていた、とビューリーに打ち明けている。（*Bury* I 14）それを裏付けるように、キャロラインもまたジョージ三世の庇護をたよりに周囲の忠言もものかは、皇太子に負けじと生来の奔放で我儘な振舞いを募らせていった。翌年、1月7日に一人娘の *Charlotte* が生まれた以降は、彼女の養育方法を巡っての諍いが絶えなくなり、二人のあいだの溝は決定的なものになった。ジョージは何としてもキャロラインを王室から追放しようと、彼女に離婚を迫り始めたため、キャロラインの自由な行動も制約を受けるようになった。そして、新聞や雑誌を通してジョージは無慈悲な悪者、キャロラインは哀れな被害者とする図式が喧伝されるようになると、やがてこのイメージが社会一般に定着していく。

1814年4月に、連合軍がトゥルーズの戦いでフランス軍を打ち破ると、イギリスではこれを実質的な終戦と捉え、国を挙げての祝賀気分に含まれた。そして、同年6月6日には戦勝記念祝賀として、また、イギリスとの同盟関係を強化するために、ヨーロッパの救世主ともてはやされたロシア皇帝アレクサンドル一世が妹の大公妃を伴い、盟友プロシア王と元帥 *Blucher* ほか各国要人とともにロンドンを訪れた。（*Bryant* 100-01）このおり、民衆の熱狂的な喝采が国賓に与えられたのに対し、摂政皇太子には“*Huzzah!*”の一声すらかけられなかったと伝えられるが、この事実もまた、ジョージの不人気のほどを物語る。しかも、この時に催された晩餐会の席に、ジョージがキャロラインの出席を認めなかったという屈辱を与えたことは、大衆のキャロライン鼯鼠に拍車をかけた。この風潮はのちに離婚騒動に実質的な決着がつく1820年まで続くのだが、じつはジョージがもっぱら諷刺や戯画の対象とされるのも、ほぼそのころまでのことだった。

キャロラインから離婚の合意が得られぬままに、1797年ジョージはキャロラインを追い出して別居生活に入り、その後、二人が同じ屋根の下で暮らすことは二度となかった。ジョージはカールトン・ハウスに住み続け、キャロラインには *Blackheath* 近くの *Montague House* があてがわれた。また、ジョージはシャーロットをキャロラインに渡すことを拒んでセント・ジェームズ宮殿で養育し、はじめは週に一回としたキャロラインとシャーロットの面会も、2、3週から数週間、数か月に一回と、

次第に制限することが多くなった。世論はもちろんキャロラインの味方となり、街中であろうが劇場であろうがキャロラインが姿を現わせば、そこには常に歓声と拍手が湧きあがったが、ジョージが豪華な馬車に乗り外出すれば必ずや冷たい視線や罵声が浴びせられ、時には石つぶてが見舞われることもあった。

いっぽう、フィッツハーバートは、ジョージとキャロラインの結婚が成立すると、一時、ジョージのもとを離れていたが、やがて聴罪司祭の助言に従ってペルメル街に戻ってきた。ところが、1803年ごろ、ルイ18世を迎えてカールトン・ハウスで晩餐会が催されたおり、彼女はジョージから看過しがたい侮辱を受けた。彼女には晩餐のテーブルに自分のために特別に用意された席はなく、「彼女の地位に従った」、すなわち、「ただのフィッツハーバート夫人」として席につくよう指示されたのだった。この屈辱を彼女は赦すことができず、これを機に彼女はジョージのもとから永遠に去ったのだった。

さて、モンタギュー・ハウスで自由奔放な生活を始めたキャロラインのもとには、さまざまな男性が頻繁に出入りするようになった。かりに反逆罪に問われるようなキャロラインの素行不良が公けになれば、ジョージにとっては彼女を王室から追放する絶好の機会となるはずだった。果せるかな、ほどなくキャロラインが数々の不貞をはたらき、その結果、1802年には不義の子を産んだとする、まことしやかな噂が囁かれるようになった。国王ジョージもこの期に及んで手をこまぬいているわけにはいかず、秘密裏に委員会を構成して事の真相を確かめさせた。一般に <Delicate Investigation> とし知られるこの調査の報告書 *The Book* は、四名からなる委員の署名入りで1806年7月14日付で提出された。すなわち、大法官 Erskine 男爵、故ダイアナ妃の父方の祖先たる内務大臣 Spencer 伯爵、首相 Grenville 男爵、首席裁判官 Ellenborough 男爵の四人だったが、これほどの著名人で構成される委員会は、当代まず見当たらないとされた。*J* の109～117行では、この報告書は Crafticant の手により以下のように記載されたことになっている。

There he says plainly that she loved a man!
 That she aroud him flutter'd, flirted, toy'd,
 Before her marriage with great Elfinan;
 That after marriage too, she never joy'd
 In husband's company, but still employ'd
 Her wits to 'scape away to Angle-land;
 Where liv'd the youth, who worried and annoy'd
 Her tender heart, and its warm ardours fann'd
 To such a dreadful blaze, her side would scorch her hand.

正確にいえば、作品には後年おこなわれた別な調査の要素も盛り込まれているのだが、いま問題に

している報告書は 1813 年に補遺をつけて出版されたものであり、その中にはさまざまな証人の宣誓証言と、キャロラインの覚書、皇太子ジョージに宛てた手紙の写しが含まれていた。キャロラインの肖像を描いたために、不義の相手とも噂された Sir Thomas Lawrence の宣誓証言も収められているが、そもそもキャロラインの不義にかかわる話は、モンタギュー・ハウスに頻繁に出入りしていた人びとのうち、キャロラインが“suborned perjurers”と呼ぶ Charlotte Lady Douglas と夫の Sir John Douglas による悪意に満ちた虚言に由来するものだった。以下の記述は *The Book* に収められた証言を、筆者が再構成したものである。

娘と会えない寂しさから、また、生来の社交好きから、キャロラインは多くの人間を家にかなり自由に出入りさせていたが、とりわけこの二人とはブラックヒースのご近所のよしみということもあり、1801 年の出会い以来、素性もよく知らぬままに親密な交際を続けていた。ダグラス夫人の宣誓証言によれば、1802 年の 5 月か 6 月に、彼女の家を訪れたキャロラインから、子供を身ごもっていることを打ち明けられたという。父親の名は明かされなかったが、もし世間に知られたら、キャロラインは「今年は二晩カールトン・ハウスに滞在したので、父親は皇太子であると言うつもりよ」と話していたという。

ダグラス夫人の証言は、夫の友人でモンタギュー・ハウスにしばしば寝泊りしていた Sir Sidney Smith をキャロラインの相手と仄めかすものだった。このスミスという男は、1799 年にナポレオンの侵攻を Acre（アクレ）の包囲攻撃で食い止めた武功により一躍脚光を浴びた海軍将官で、ホイッグの論客としても知られる才人だった。性格は派手でうぬぼれが強かったため、キャロラインのお相手として「さもありなん」と考えられたが、裏付けとなる証拠も証言も信憑性を欠いていた。

翌年の一月、旅行から戻ったダグラス夫人がモンタギュー・ハウスを訪ねてみると、赤い布にくるまれた赤ん坊がソファーに寝かされており、キャロラインが言うには「この子はあなたと最後に会った日 [1802 年 10 月 30 日か 31 日] から二日後に生まれた」とのことであった。ダグラス卿の証言は、妻の言葉を追認するものでしかなく、キャロラインが大逆罪 (high treason) に問われかねないこの噂は、実質的にダグラス夫人が捏造したものであったといっている。ダグラス夫妻の正体ははっきりしないが、親しかったキャロラインとの間に何らかのいさかいがあったために、ジョージからたっぷり賄賂をせしめて偽証をしたものと考えられた。証人を喚問した委員会の見解によれば、キャロラインが 1802 年に妊娠し、出産したという証言を裏付ける客観的な事実はなかった。それどころか、キャロラインが Wilkin と呼んでいたこの「私生児」は本名を William といい、1802 年 7 月 11 日に Brownlow-Street Hospital で生まれ、貧しい母親である Sophia Austin にかわってキャロラインが養子として育てていた子であることが判明した。

キャロラインの許には 7 月 14 日付の報告書が、国王の指示により委員会から届けられた。しかし、この委員会の存在自体が彼女の知るところではなく、また彼女にはいかなる反論や説明の機会も与え

られずに審理が行われたため、キャロラインはこの先の庇護を願いたいとの手紙を8月12日付で国王に送付した。1813年3月25日付のビューリーの日記によれば、ダグラス卿は近頃この国のフリーメーソンの会員資格を剥奪され、また、Sussex公の家内からも追放された、とのことだった。この情報をもたらせたのはビューリーの友人だったが、彼女によれば、「この結果は、すべてこのおべっか使いの仕業に対する義憤が導き出したものだった」。

1806年の報告書によりキャロラインの無実は事実上あきらかとなり、カールトン・ハウスでは情報の秘匿に懸命になった。しかし、民衆は王室のスキャンダルを嗅ぎつける鋭い嗅覚をもっており、かれらはキャロラインに対する同情の念を強め、ジョージに対する憎悪を募らせるのだった。さらに、1813年2月中旬には、パーシバルによってジョージに不利な証拠と証言の盛り込まれた *The Book* が、政権への夢を断たれたホイッグの側からついに公刊された。刊行に先立つ2月3日には、先に挙げたラムの 'Prince of Whales' など一連の皇太子批判の記事を掲載したかどで起訴された John と Leigh の Hunt 兄弟に二年の禁固刑が言い渡されているが、刊行の話が公にされていれば二人への判決も覆っていたことだろう。(Roe 180)

3月5日の庶民院では、Lyon 議員がキャロライン擁護の立場から例の *Report* を読み上げ、彼女の無実が明白であり、ダグラスらの事実捏造こそが反逆罪に問われるべきであると発言した。議会の九割方の発言はキャロラインの無実を支持していたが、問題発覚からすでに12年もの歳月が流れたこの案件に対して、議会にはこの時すでにうんざり感が漂っていた。この時、この件に関しては新たに別な調査と審理が必要であるとの動議が外相 Castlereagh から出されると、これが了承された。対ナポレオン戦争に加え、革命につながりかねない扇動家や民衆の不穏な動きがイギリス国内各地から報告されると、議会も政府もそちらの方に敏感になったという事情もあり、問題は先送りされたのだった。新たな審議は1820年8月17日から貴族院において審議が始まることになるのだが、実質的に、これはキャロラインの弾劾裁判に等しいものだった。(以下、次号)

(出典、参考文献等は、次号末尾にまとめて掲載)